新撰和歌集

上

へ4
659
1

新撰和歌集一部

つゝ井筒題詠

この集三百六十首の人々の和歌を紀貫之の古抄中より古を尋ねて世世書被ひ伝ある人々の古今つゝうはこと葉を和かの中に取り出して板りすることゝ思ふ梨

利へ門
649
1巻

新撰和歌集序

玄番頭従五位上紀朝臣貫之

昔延喜の御宇に世々を尊び
人々に有慶今撰集の勅命を蒙り
和歌一千篇を文隆勅命抽き揚げ
偽勅者執事を落納し奉勅者筆
者に紀貫之に未及抽撰分量
但詞勢之所景物に撰定仰せ上代

明治三六年十月廿九日購求

之篇義淵遠而文質下流之化
文偏巧而義漸疎於抽始自弘仁至
于延長詞人之作花實兼而已今
之取選玄之又玄也如春花秋月
淫器添於言外之美毛色影響浮藻
於詞表皆是以動天地感神祇厚
人倫成孝敬上風化下流潤刺
上雅諫假文於鹿下逸獲取

義哉誠〻中古やまとの風に
秋篇以其什歌各〻什各相聞文兩〻
儷書焉慶賀哀傷離別羇旅恋
哥雜歌〻流各又對偶懷三百六十
首分為四軸蓋取三百六十日四時
四時事物之詠寵帰月將山上獻之
猶山晩松聲雲〻影已結湘濱秋
竹悲風之聲忽遠傳勅撰之亦已
荒廢其跡如旅於荊中獨屑落
淚於襟上若貫之哲言歌亦莫遠恨
彼綜覈之草猶混鄙野〻篇故称
記本源以俟末代云尓

中納言兼右衛門督藤原兼輔 承平三年八月廿六日
丙申帝 延長八年九月廿九日 四十六
黄帝 崩葬橋山
堯崩蒼梧之野葬於江南九疑是為零陵

新撰和歌集巻第一

春秋　百二十首

紀貫之

袖ひちてむすひし水のこほれるを春立けふの風やとくらん

藤原敏行朝臣

秋きぬと目にはさやかに見えねとも風の音にそおとろかれぬる

讀人しらす

春霞たてるやいつこみよしのゝ吉野の山に雪は降つゝ

おなしく

わかせこか衣のすそを吹かへしうらめつらしき秋の初風

素性法師

春たては花とやみらん白雪のかゝれる枝に鶯そ鳴

よみ人しらす

きのふこそさなへとりしかいつのまに稲葉そよきて秋風の吹

つらゆき

ふる人もなき宿に春来ては八重むくらにも咲わたりけり

萩のうへをよそうくとさきて秋風の人よりはやくはつ風の吹

梅のおちばのうへをへうもとゆやうふこゆれくさきてあるくはつ

雜人秋くれば

八月九日時雨ときとうねとも秋の雨とおもふとうの保の成

源宗于朝臣

かきくもりなる松の梢もまたかつ一しぐれ降りけり

きりのうへに

和歌をあるときこの山の風はやくもの秋をきくとはなく

藤原言直

まやとにはなやとときくとうとしも萬さふしもいとすもあるか

あるく人とまつ

恋ゆくてあるひとの人のうつ青あるとの夢をうつあけはなれ

さそれはもの

花の香をの物の俤よりてとて常はそふまつ人のはやう

拾遺

こゝろひとつ人をあはしてしきりて七夕の人しきりて絶ることを

読人不知

雪ふらぬ小松ハきえにける雪のくれなゐもみちぬらんや
らん

つらゆき

あき風よ秋の夕ゆけしはやかのかへし瀬よ浪のよするぬ
こそまされ

よみ人しらず

うめかえにきゐる鶯春かけて七夕もいまた君ハ
ふりつゝ

ふちはかまの花さくらむ

あきさらはあふと心そつらぬ七夕のまちかひとよひあふハ逢ふ

凡河内躬恒

春の夜のやみハあやなし梅の花いろこそみえねかやハ
かくるゝ

かしこにあそふすゝしき七夕のねるよに寐てすゝしけ

山邊赤人

あすよりハ
七夕までハ花の流ましもとしめし野よきのふもけふも雨
ハふりつゝ

よみ人しらず

木のまより
もれくる月のかけみれは流くして秋ハきにけり

春日野の飛火の野守いてゝみよいく日ありて若菜
つみてん

伊勢

うつろハむことこそ惜しけれ秋萩のをれぬ計における白露

よみ人しらす

揺らねとも雨にぬれぬるもみちはのおもふ心をくらへてしかな

よ秋露とも鹿もよ鳴つへよ萩の下葉もうつろひにけり

君か為生ひぬるよみてみるよふ秋夜よ露ハふりけり

まろかるに来る秋かしも何ことよ生のおもひましきしき

清原ゆきさ

まて日数の寄るつゝや白妙の袖ふりはへて人の待らむ

よみ人しらす

秋の夜は道をも海へひぬ松虫の声をきかてハ宿やかましし

つらゆき

まよ鶴こそ秋くる夜ふかくこえ中人の孫そいろ増りける

読人不知

目くらし北の山里の名残れハ風のおとにも秋そしらる

伊せ

春霞たつを見すてゝゆく雁は花なき里にすみやならへる

よみ人しらす

はるかすみ霞ていにしかりかねは今そなくなる秋霧のうへに

貫之

おしむらむ春のそむ桜花ちるをはなかくならん

読人不知

秋きぬと木の葉も色つくはけふやひとりある人のねまさる

つらゆき

桜花さきにけらしなあしひきの山のかひより見ゆる白雲

坂上是則

又歌寸 秋ハきにけり

秋のおもへしられぬやまの風に木葉の山のうつろひぬらん 色つくらん

紀友則

みよしのゝ山辺にさける桜花雪かとのみそあやまたれける　れけれ

藤原忠輔

しらくもの中に鳴されて雁かねの声ハさひしくかくれける　まうぬまれまさりける

素せい

山ちかく里離れたる梅を心のゆくまで打ながめ月をまち

よゝひとゝ秋ゝまち

たゝまくもよはれるうちに花の枝をゆくまで折よ月

やゝ梅をうゝ伝ふれて来る春を尾ゝ立ちつゝ

ひとりかな

をゝ為ながめ折られて枝うちはらふの山道と立ぬ

ゝ春性

ゝ春ながめ人ゝ折ゝられてゝゝ折て歩つゝ

やゝ人ゝ

やゝ折ゝ折れ梅さらなゝ見て折ゝむゝ

梅き

ゝ梅

ゝ春ながめ山里の花ゝ見ちらん侵てさら

ゝ春性

玉ゝ花ゝかつゝき山乃春ゝ折りけゝふゝ見ん

うせい

見ゝるせゝ柳さらゝゝとゝまゝて折ゝ春ゝ

柳ゝ

藤原清正

おのへこそさきて木のはかれ行むら雨こそ秋のなこりなれ

河原左大臣

たちこめし雲しつくにも秋の夜をむかしにかへす月の光は

よみ人しらず

みよし野の袖ふる山のうへにちる思ひしかとも花のちるらむ

良峯宗貞

まれのなの霧よこめて立かくせ春をおしむ山風

よみ人しらず

春はくれてもしらぬむら雲を吹はらひしそやまおろしの風

素性法師

いさけふは春の山へにましりなむくれなはなけの花のかけかは

壬生忠峯

袖ひちてむすひし山を秋たけて霜おきまよふ露そこほれ

僧正遍昭

淺緑いとよりかけて白露を玉にもぬける春の柳か

中納言家持

棹鹿乃あさたつをのゝ秋萩ハ玉とみるまておける
志ら露

法橋遊さ

青柳の糸よりかくる春しもそみたれて花もほころひ
にけり

讀人志ら寸

いもか寝くとむかふ立田山今そ紅葉の色増りけり
古ちく成ぬしなかの数まさるいろかはかりむかしに
都らの御門乃御歌とかん

たゝみね

ひさかたの月のかつらも秋ハなほ紅葉すれはやてりまさるらん

きのありとも

櫻色に衣ハふかくそめてきむ花のちりなむ後のかたみに

忠岑

あめふれはかさとり山のもみち葉ハゆきかふ人の袖さへそてる

法橋遊よ

櫻いろの海さらさみなもとに花を紅葉に
あさしさとハ花をやこ海ちるかた

[illegible]

葉室朝光

世中よ[illegible]

讀人不知

さかやき[illegible]

これ[illegible]

[illegible]

[illegible]

在原行平朝臣

[illegible]

開雄

[illegible]

[illegible]

[illegible]

文屋朝康

あさぢふの野とかくれやつらぬきてかりにかよはぬ人の心を

典侍藤子朝臣

ちるもみぢはかりとぞきる秋ぎりのたちかくしたる山のかなた

よみ人しらず

白川のせゝのうちなる秋ぎりの立かくしたる山のかなた

むなしく

駒とめてなほ行かたしなにしおはゞ逢坂山をこえぬとおもへば

菅原定方朝臣

秋ぎりのたちかくしたる山のかなたにおもひをはるかなるかな

仲平朝臣

橋ちかき木の葉ふりしき風たちてやまぶきの花ぞ散ける

ゆきかへりもとめてをれば奥山の岩ねをとめてやまぶきの花

紀のあきらをれてたちまちにかくしたる橋ぞきえすなりける

文屋朝康

後ちりて三月ばかりにもなりぬるかなかくしたるやまぶきの花

つゆよ

ちるも散らぬも風のまにまにあきのゝに涙そおける

こし遊きの朝た

よきつかなも志ら楊勝布山本にのくの露とくまよひに

読人不知

さるも三笠の山の陰におきしはもとふるともいつまてあれめや

おもうしく

なきよるる唐の衣もおちらん悲しき霜の萩は風

保と

春ことに松の海辺の花とそておもひぬるかな袖や ぬれまさらん

表道列樹

山河よかせのかけたる志からみハ流もあへぬ紅葉なりけり

ちきりのれなきおもはうちまち きと

なおねん数てきぬをあれともちきれ 掛思ひ もるう

よく人おもしあ

おりしのともかへにふりし波もてちとくかと 袖 ふほひかりかり ひかかり

蛙鳴かはづなく河よかはづなくあをやぎ山吹乃むせ

原見王

世世

いつちとをとをれいへとも

世世乃まにまにいつくとも赤き花をへめん

よろこん志ます

春たちぬとて春乃ふかくさつ山吹乃花

きはかりも乃春

霞ゝ折てかさしきくとあむをあはなへらくて

八十氏

吉雄

そうして

すなわち

たちてもとおくはてもとんあ子影乃水底乃ひてさけ山吹

すりかくの朝乃

あさ風乃吹ちらすてちるきくをもうあぬ花乃よ

ちるを

後人不知

かつなくねて乃山吹ちるまの花の盛よ乃ゆ乃ゆ

九行内ちるね

世間あるよおくとあれんあ初春乃世きゝやとはきちるきくの

のちる

春雨川岸にやまふき咲風よそこの水ぶくうつろひぬ

平貞文

秋ぐさとこきて時雨ぞおりかけきくのもうつろひにけるこのまもなく

みつ祢

あるかなきかの夜ぶかのひとりすきしてよはかぬ人のこころん

つゝゆき

咲そめし時より後ならぬとへて世にまたやもとはぬうら

はつ雪

ふるとして果てぬ人よ夜ぶかくぬれぬ花の枝に残れる

読人しらず

まてもこむ人のあるかとおもふまに雪ぞ降ぬる

はつ雪

探ぬ松よかれる藤をぬ花ぞ咲けるこゝもはつ雪

ひさかたの光りのどけ春の日に静心なく花の散らむ

大

藤原俊蔭

花のちるをやかてしたひて麗くるの山の鶯の声

よし人志寸

きこへける秋のくれをとひきたにふるくひとの哉ともそられ

清ゆき

咲ちらへは義もまつの桜もかくてそこらは去かれもるあし

そせい

和泉はしに袖にこきいれてをていまん秋はかさりとらん人のあ

ろうく清し

桜ちりも宿の心は表にかるかほてふり時こそえんてよする

我らせい

りみらしの年まて去年の漆は紅涼と涙や立らん

清ゆき

花もこし見義ぬる後は苔のふるさとこそ成ぬへらなれ

みつ祢

道志るしゆる鳥もいらんりうちうとぬさとも向て秋たなかり

よき人新うす

[illegible]

おきうせ

[illegible]

つら遊き

[illegible]

新撰和歌集巻第二

夏　冬　四十首

郭公池のふちなる山ぶきの　つきもあらむ
そこなる蛙（河）　かはずなく　月さえ水の面をこそ
ほとゝぎす　花橘に　香をとめて　鳴ぬ人やあるき
あるこゝろ

鶯の　鳴ぬ時なし　ほとゝぎす　花の声をきこゝろや
あるこゝろ

かなしつき　消なの　あはれ　ほとゝぎす　このこゝろを
月　花　ちる　ほかけ　人の袖の

ほとゝぎす　なく

三山よ　愛ふ　ほとゝぎす　池のつゝみ　色つきそめり

秋の月　花　ほとゝぎす　海こゝろ　ふるさと　かねて　つゝみ　秋　こゝろ
のこゝろ

伊世

ほとゝぎす　鳴　こゝろ　花の声をきこゝろや
あるこゝろ

かなしつき　消なの　あはれ　ほとゝぎす　このこゝろを
月　花　ちる　ほかけ　人の袖の

ほとゝぎす　なく

三山よ　愛ふ　ほとゝぎす　池のつゝみ　色つきそめり

中納言家歌

うゑすゑ枯もいまさらぬ時雨さほの山のふかきみどりよ

よこ人新こ

神無月時雨とともに神のゆくふるとしをしるこそ

東性

いろのけしふかき新の初しぐれもしぐれぬ

よこ人新こ

散てはなごめ散れはてしひとはもとわふるぬひ

なるとしのつゆこそはかの山ちかけるまつ初ふり出てそく

雲さ寺をとゝ初ゝぬ散まはなけまも雲の波ハ寺ゆ

延喜御制歌

吳川乃山時雨ふるとやあやめ引まの神とそてかる

ひとまろ

きまの山

梅乃ハ風ふ雨ふるまてこそ人ひをかをそ人乃

つゝゆき

あ乃ふ雪ふすとす風時雨なくこ者ふあ人る志ぬめ

とものり

雪ふれは木ことに花そ咲にけるいつれを梅とわきてをらまし

うたい

光つゝしき吉野の花の咲たてら見しとあはれ　行家

よ〓まゐり

名をたに佐保の河瀬に聞つゝも夜半に千鳥の鳴

つらゆき

夜ころもきつゝかよへは相坂の関の清水の影寒くしてある

おきかせ

浦近くふりくる雪は白浪の末の松山こすかとそみる

清田記

郭公まつ夜ふけぬこゑそれやしのふにかよふ道やまよへる

よみ人しらす

花くれしわかやとに梅を植しかきての枝まなく咲けれは

くれしときの夜の月かけしあはれとそみるらく摘てかうのし

かゝやく枝にもあふりしとまるらんなとも花もなきてみえ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

冬こそうそ[illegible]

つゝみ

[illegible]

はこき

きのふとひとつとて[illegible]

ふるや姫

[illegible]

[illegible]

[illegible]